

2 子宮頸部腫瘍における Human Papillomavirus (HPV) 検査の意義

児玉 省二・小島 由美・笹川 基
本間 滋

県立がんセンター新潟病院産婦人科

【目的】子宮頸部の細胞診に HPV 試験を併用し、診断的意義を明らかにすること。

【方法】子宮頸部のがん検診希望者、二次検診紹介者、異形成で定期的な観察者を対象とした。HPV・DNA 検査は、ハイブリッドキャプチャー法(中-高リスク型13種類)で検索した。

【成績】HPV 検査陽性は1351例中27.9%で、その内訳はがん検診希望者812例中5.5%、二次検診紹介者297例中73.7%、異形成観察者242例中46.5%であった。HPV 陰性974例のうち、異形成33例、上皮内癌6例、浸潤癌7例(腺癌5例、スリガラス細胞癌1例、扁平上皮癌1例)であった。診断精度は、HPV 検査の感度85.4%、特異度89.7%、陽性反応適中度71.6%で、細胞診はそれぞれ88.8%、90.7%、74.3%であった。ただし、HPV 検査は施行全例に対し、細胞診検査はスクリーニングされた症例が含まれている。

【結論】子宮頸部腫瘍の HPV 検査は、頸管粘液の多い腺癌や特殊組織型の場合に限界を示した。

3 当院における抗 MRSA 薬の使用状況

— TDM (Therapeutic Drug Monitoring) と適正使用について—

張 仁美・手塚 貴文・茂呂 寛
田邊 嘉也・田村 隆*
青木 寿也**・下条 文武

新潟大学大学院医歯学総合研究科
臨床感染制御学分野(第二内科)
新潟大学医歯学総合病院薬剤部*
同 検査部**

【背景・目的】MRSA は院内感染の主要な原因菌で今後も増加が懸念され、診断、治療の重要性が高まっている。また抗 MRSA 薬の使用に際して、有効性、安全性を確保するために TDM が重要であるとされている。今回我々は、当院での抗

MRSA 薬の使用状況と TDM の実施状況を中心に調査し、抗 MRSA 薬の適正使用の介入に向けた方向性について検討を行った。

【方法】2007年から2008年3月で、当院入院中に抗 MRSA 薬(TEIC, VCM, ABK, LZD)を3日間以上静脈内投与された20歳以上の症例を対象とし、抗 MRSA 薬の使用状況と TDM 実施状況を中心に retrospective に調査した。

【結果・考察】抗 MRSA 薬の使用例は重複例を含め476例で、TEICの使用例が最も多く、次いで VCM 使用例を多く認めた。TDM 実施率は、TEIC 42.2%、VCM 62.8%、ABK 13.0%と全体的に低い結果であった。今後当院では、抗 MRSA 薬を完全届け出制とすることを検討している。全症例に対し、投与前の TDM 解析ソフトを用いた初期投与量、維持量の設定、TDM 実施の推進、TDM 結果の迅速なフィードバック、その後の投与設計の調整を行うことで抗 MRSA 薬の適正使用が実現可能となると考えられた。

4 口腔カンジダ症におけるイトラコナゾール内用液の使用効果

小根山隆浩・田中 彰・又賀 泉*

日本歯科大学新潟病院口腔外科
日本歯科大学新潟生命歯学部口腔
外科学第2講座*

【目的】抗真菌薬イトラコナゾール1%内用液(以下内用液)の使用効果について報告した。

【対象および方法】口腔カンジダ症が疑われた53例について簡易培養検査を行い、24例(45.3%)にカンジダ菌が検出され、24例中19例に内用液15例とカプセル7例(重複3例)と、カンジダ未検出であった29例中16例に内用液9例、カプセル7例を使用した。

【結果】臨床的治療効果ではカンジダ菌が検出された19例のうち内用液投与15例で有効率80.0%、カプセル投与7例で有効率57.1%であった。カンジダ未検出で内用液投与9例では有効率33.3%、カプセル投与7例では有効率28.6%であった。有害事象では内用液投与例で軟便3例、便

秘1例, 悪心1例, 薬疹1例を認め薬疹1例と悪心1例で投与を中止した。

【結語】イトラコナゾール内用液はカプセル製剤よりも有害事象は多いものの, 口腔カンジダ症に対する有効性は高かった。

5 *Candida krusei*が原因と考えられた術後腹腔内感染症の1例

小原 竜軌・塚田 弘樹・松下 宏*

倉林 工*・横山 直行**

大谷 哲也**・片柳 憲雄**

新潟市民病院感染症科・呼吸器科

同 産婦人科*

同 外科**

症例は37歳, 女性。2008年1月頃から下腹部膨満感が出現したため1月30日A病院受診。同院で卵巣腫瘍, 子宮体癌及び糖尿病と診断され加療のため当院紹介。当院産婦人科に2月28日入院, 3月7日予定手術のところ3月5日に乏尿, ショック状態になり卵巣腫瘍の穿孔による腹膜炎が疑われ, 緊急に子宮全摘術及び付属器腫瘍摘出術施行。手術時に十二指腸潰瘍穿孔が判明し, 胃全摘術及び十二指腸切除も施行された。術後集中治療室で全身管理され腎不全, ショック状態は徐々に改善したが, 熱が持続し炎症反応が改善しないため当科にコンサルテーションがあった。一般抗菌薬不応性であり, *C. krusei*が複数回腹水から検出されたこと, 血清 β -D-グルカンが高値陽性であったことから, 術後腹腔内感染に*C. krusei*も関与していると考えMEPMに加えてMCFGを併用したところ徐々に炎症反応は軽快, 治療は有効と考えられた。

NACの中でも比較的まれである*C. krusei*の関与が考えられた術後腹腔内感染症を経験した。*C. krusei*に対してはMCFGが有効と考えられた。

6 ホスホマイシンの新しい作用の探索

西山 晃史・近 幸吉*・田邊 嘉也**

下条 文武**・山本 達男

新潟大学大学院・医歯学総合研究科・細菌学分野

県立坂町病院・内科*

新潟大学大学院・医歯学総合研究科・臨床感染制御学分野(第二内科)**

ホスホマイシン(FOM)は広範な抗菌スペクトルを持つ細胞壁合成阻害薬で, 感染症領域で広く使用されている。FOMは抗菌活性以外に免疫修飾作用を有することが報告されている。他剤との併用において難治性感染症への有効性も示唆されている。本研究はFOMの新規作用の探索を目的とした。FOMによる長時間処理(4h)によりヒト白血球のToll-like receptorの発現量が変化するので, 同条件下での自然免疫(炎症性サイトカイン産生)に対する影響を検討した。エリスロマイシン(EM), クリндаマイシン(CLDM)との併用時の効果も併せて検討した。LPSによるTNF- α , IL-8産生はFOM処理により有為に増加した。この効果はEMとの併用によりさらに増強された。一方, CLDMとの併用はFOMの効果に影響しなかった。FOMとEMの効果は自然免疫系の活性化を介した生体防御に貢献する可能性が示唆された。

II. 特別講演

子宮頸癌の発生メカニズムとHPVワクチン

— Translational reserchでがん予防が可能に —
自治医科大学附属

さいたま医療センター産科婦人科教授

今野 良